



イタリア・マルケ州の中世都市をめぐる

Medieval cities in the Marche Region, Italy

民岡 順朗

TAMIOKA Junro

株式会社 オリエンタルコンサルタンツ/
東京事業本部/都市グループ



筆者は、1998年から2003年にかけて、文化財保存と修復を学ぶためにイタリアに滞在し、各地を巡った経験を持つ。本稿では、日本では知られていない、中部地方マルケ州の「中世都市」などの魅力を紹介したい。

1. マルケ州について

アドリア海側の地方、マルケ州 (le Marche) は、ラツィオ州 (州都ローマ)、ウンブリア州 (州都ペルージャ) とともに中部イタリアを構成する。面積は9,694km²、人口は約145万人で、州都はアンコーナ (Ancona)。

一帯が、歴史舞台に名を馳せるようになってくるのはルネッサンス期まで勢力を振ったアンコーナがコムーネ (自治都市) として活躍を始めてから。その後16世紀から19世紀にかけて「教皇領」となり、政治的に安定した一方、大都市の存在を認めない教皇の統治政策を反映して、核都市の存在しない地方となった。

風光明媚な自然景観や漁業資源、ワイン、オリーブ、果物などの農業や手工業 (製靴、鍛造など) が盛んで、マル

ケ州で夏のバカンスを過ごすイタリア人の割合は、過半とも8割ともいわれるほどの、一大観光ゾーン。

2. アーゾ渓谷および周辺のまち

マルケ州を構成する4県のうち、最南のアスコリ・ピチェーノ県 (人口約367,000人、73自治体で構成) は、面積2,086km²の74%が丘陵もしくは山岳地帯であり、中世に発達した中小の「丘上都市」が点在し、豊かな田園風景と一体となって、息を呑むほど美しい風土を形成している。ここでは、「アーゾ渓谷 (Val d'Aso)」と呼ばれる一帯のまちのいくつかを巡ってみよう。

●1 リパトランソーネ (Ripatransone)

リパトランソーネは、海岸から12kmほど内陸に入った、標高494mにあるまちで、人口約4,300人、面積74km²。「イタリアで最も細い道」のあることでも知られる。その幅員は、なんと43cm。太った人は通れない。標識がイタリア語とドイツ語で書かれていることから分かるが、マルケ州というところは、なぜか、山にも海にもドイツからの観光客が多い。



■図1-マルケ州の位置



■写真1-アーゾ渓谷の田園景観と遠景のまち



■図2-アスコリ・ピチェーノ県に点在するまち

さて、イタリアにはマルケ州に限らず、丘上都市が多い。①マラリアを運ぶ蚊の多い低湿地帯を避けたため、②諸侯対立を背景に天然の要害となる地形が好まれたため、③領主が農業・牧畜作業を監督するため、などの理由で、高地に都市が築かれたらしい。そうしたまちでは急な階段が多く、「バリアフリー」の概念からほど遠いのだが、意匠が統一されヒューマン・スケールを持つためだろうか、「歩きにくさ」はまったく感じない。お年寄りも、「堂々と・ゆったり・いきいき」とまちを闊歩している。マニュアルでつくられる「近代都市計画」なるものが薄っぺらに見えてくる。

●2 ペトリートリ (Petritoli)

人口2,500人ほどの小さなまちペトリートリ (23km²) は、10世紀の築城がその起源。2003年7月13日に訪れた折に、ちょうど「収穫祭」の開催中であつた。

アスコリ・ピチェーノ県一帯では、6月中旬から9月一杯にかけて、農業や宗教に由来する「フェスタ (祭り)」が、それぞれのまちで盛大に繰り広げられる。まちとまちが近接しているため、一箇所に腰を落ち着けて長期間バカンスを楽しむイタリア人やヨーロッパからの観光客は、夕方になると毎日どこかで開かれる「フェスタ」に繰り出して楽しむのである。

●3 アルティドーナ (Altidona)

歴史家によると、このまちは遙か昔、紀元前16世紀ごろ、ギリシア系移民による居住に起源を發するという。その後、紀元前485年にローマ人が侵入したことが、考古学的に分かっている。城郭都市アルティドーナの名は、ラテン語の Altum Dunum、イタリア語で Monte Alto (高い山) に由来するが、まちは海岸から3.5kmの距離で、標高は225m。人口は約1,900人で面積は13km²。

1970年代に人口が増え、市はその受け皿として、海岸部の開発を行った。のちに紹介するマリーナ・ディ・アルティドーナは、アルティドーナ市の「飛び地」。

200mちょっと丘に登るだけだが、海岸部の湿気から解放されて涼しく、絶好の避暑地となっている。マルケ州はアドリア海からの風が吹き降ろすため、冬は寒さが厳しいところ。9月になるとバカンス客が一斉に遠のき、とても寂しくなるという。

イタリアの中小都市では、大きい広告看板を見かけることはほとんど無い。そのため、オレンジ色に統一された夜間照明の効果は抜群で、大理石やトラバーチン (縞状構造をもつ石灰石) の渋い色と調和してとても官能的。祭りのときなど、ちょっと化粧を施すだけで、立派な舞台に早変わり。

●4 グロッタツゾリーナ (Grottazzollina)

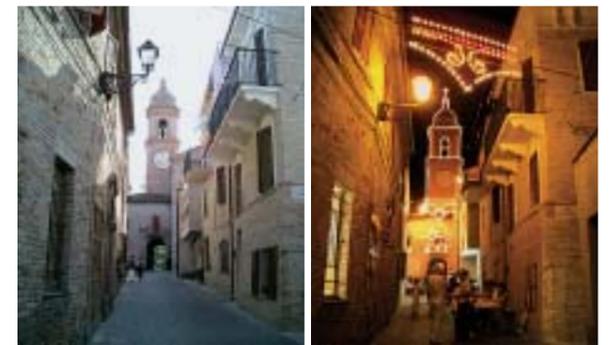
中世時代の城壁とお城がよく保存されているまちで、人



■写真2-リパトランソーネ全景 (左上)、急勾配の下り坂が、丘上都市であることを物語る (左下)、イタリア最狭街路と記された標識 (右上)、街路の様子 (右下)



■写真3-ペトリートリの歴史的都心部を舞台にした「収穫祭」目抜き通り (左上)、農作業や農産物をモチーフにした飾りなどを満載した「引き車」で通りを行進する (左下)、薄暮のライトアップ (右上)、通りを埋める「引き車」 (右下)



■写真4-アルティドーナの歴史的都心部 右側は祭りの期間中にライトアップされた様子 夏期には、昼のまちはシェスタ (昼寝) で静まり返り、広場で遊ぶ子供の声の時おり聞こえるだけ まちは夕暮れ後に息を吹き返す

口約3,000人、面積9.2km²。2003年8月2日には、「中世の時代フェスタ」という祭りが開催されていた。貴族同士の抗争のすえに、どこかの騎士がいくさに勝ち、このまちに入城、市民がその行進を広場で迎える、という歴史的シーンを再現する祭りで、中世の甲冑を身に着けた騎士とその家来たちが馬にまたがり、そのあとを古楽器を持ったプラスチックバンドが大音量で音楽を奏でながら、まち中を練り歩く。

広場やお城では、当時の衣装を身にまとったボーイやウェイトレスが、これまた当時のレシピで作った料理を給仕してくれる仮設レストランが大人気。

イタリアの観光の秘密は、バカンス期間のあいだ、お客が市民と同じような生活を営み、いろいろなイベントを地元の人と同じ視線で楽しむことにあると思う。

●5 トッレ・ディ・パルメ(Torre di Palme)

英語に直訳するとTower of Palms(椰子の木の塔)という名を持つ小さなまち。とても由緒のある古い教会でも有



■写真5—グロッタツッリーナの歴史的都心部を舞台にした「中世の時代フェスタ」



■写真6—中世の街並みと、壁面をうまく活用した「緑」の演出(トッレ・ディ・パルメ)



■写真7—壮麗な内装の教会(左上)、まちの紋章の付いた旗で飾られた街路(左下)、中世の塔(右上)、中世の一般庶民の婚礼を再現したイベント(右下)(サン・テルビーディオ・ア・マール)



■写真8—一ボーポ広場(左上、左下)、広場を取り囲む柱廊(右上)、バロック様式の邸館のファサード(右下)(アスコリ・ピチェーノ)



■写真9—トッレ・ディ・パルメから遠景に臨むまち(左上)、海岸通りのオープン・カフェ近くの店のジェラートは、イタリアでも最上の部類!(左下)、プライベート・ビーチ(右上)、海岸通りの夜の散策(右下)



■写真10—手入れの行き届いたビーチ(左)と、公園(右)(クーブラ・マリッティマ)



■写真11—海岸はもともと岩場だったところを人工的に整備(左)、2DKタイプ中心の分譲リゾートマンション デザイン、色彩、屋根勾配が統一されている(右)(マリナ・ディ・アルティドーナ)

名だが、洒落たジャズ・バーやクラブがあり、ナイトライフが充実するちょっとセブなスポット。

イタリアに限らず、地中海都市というのは、まちのなか(城壁の内側)に植樹する伝統がない。それでも、まちを歩いていて違和感を感じないのは、景観的統一があり、それがアメニティを形成しているからだろう。

そこへいくと、このまちの緑の演出は、なかなか気がきいている。密集した家屋の壁面を積極的に活用しているのだ。アルプス以北の国からやって来るお客さんに対するサービス精神の表われであろう。

●6 サン・テルビーディオ・ア・マール(Sant'Elpidio a Mare)

古代ローマ時代に起源を持つまち。一帯の都市のなかでは、比較的大きな部類に入る(人口約15,000人、面積50km²)。11世紀につくられた歴史的都心部が完全に保存されている。近隣都市との抗争によって1377年にまちが破壊されたが、のちに再建され、1828年に教皇レオニウス12世によって城が拡張されている。

羊皮紙の写本や、歴代神聖ローマ皇帝および教皇の勅書などを収めた古文書館がある由緒正しいまちであるが、1993年以降、全欧規模のグラフィック・ビエンナーレを開催する現代感覚を有しており、また、世界随一と称される「靴の産業集積地」の有力都市でもある。

3. アスコリ・ピチェーノ(Ascoli Piceno)

人口約52,000人、面積16km²を擁する県都。15世紀後半のルネッサンス期には、多くの科学者や哲学者を輩出して隆盛を極めた。この時代に生まれた「人間中心主義」の思想は、都市計画にも大きな影響を与え、広場を中心にしてまちを構成する手法が流行した。

また、「トラバーチンのまち」という異名があるほど、建築材料としてトラバーチン(縞状構造をもつ石灰石)が使われている。近傍の、アクアサンタ・テルメは現役の採掘場で、ここで切り出される石は、イタリア中はもとより、外国にも輸出されている。中世には200を数えたといわれる「塔」のまちとしても有名。

4. 海岸リゾートのまち

●1 ポルト・サン・ジョルジョ(Porto San Giorgio)

人口約16,000人、面積8.7km²の海浜都市。「聖ジョージの港」という意味の地名が暗示するように、要塞都市として発達したらしい(ジョージは戦いの守護神)。

イタリア全土のみならず全欧からリゾート客が押し寄せ、アドリア海沿岸でも知名度のあるまち。ホテル、ディスコ、

レストラン、カフェ、映画館、ヨットハーバーなど、宿泊・レジャー施設にはこと欠かない。

●2 クーブラ・マリッティマ(Cupra Marittima)

海沿いの近・現代地区、道路を挟んだ二つの丘に立つ中世地区、さらに北側内陸部上方にある古代ローマ地区に分かれている珍しいまち。海沿いの公園がとても落ち着いたたたずまい。人口約4,800人、面積17km²。

●3 マリーナ・ディ・アルティドーナ(Marina di Altidona)

前出のアルティドーナ市の飛び地として開発されたリゾート地兼住宅地。夏のバカンスシーズンには、ローマなど大都市からの長期滞在客で活気づく。といっても8月15日(聖母被昇天の日)前後の超ピークや土日を除くと、ビーチがごった返すということもなく、のんびりした海水浴を楽しめる。高速道路の入口が近くにあるため、一帯を巡るバカンスの拠点として最適。

5. その他、おすすめのまちなど

ぜひ訪れたいまちとして、フェルモ(Fermo)、モンテルッピアーノ(Monterubbiano)、カンポフィローネ(Campofilone)、マチェラータ(Macerata)などを挙げる。地図を見て、知らない都市を訪ねるのも面白い。

日本からのゲートとしては、ローマかボローニャが便利。ただし、マルケ州は鉄道・バスとも極めて不便なのでレンタカーの使用が必須。ローマからアルティドーナまでは、高速A24でラクイラ(L'Aquila)を経由し、途中一般道を使いアドリア海に出て、高速A14をボローニャ方面に北上してペダーソ(Pedaso)出口を降りる。全行程230kmで所要約3.5時間。ボローニャからは、高速A14をひたすら274kmほど南下すればいい。

6. 日本の観光政策へのヒント

あまり知られていないイタリア中小都市の様子から、ツーリズム成功のいくつかの秘訣を、つかみとっていただけたらと思う。しかし、私は、施策の最大ポイントは「需要創出」だと考えている。イタリア人は量的には日本人より働かないが、時間対効果では、我々より成果を出しているのでは、と時々考えてしまう。

団塊の世代、企業の部課長クラスが一斉に定年を迎えたとき、みんなで楽しくバカンスを過ごすようになってはじめて、「観光立国」が現実味を帯びてくるのでは...

〈参考資料〉
アスコリ・ピチェーノ県HPのアドレスは以下。
<http://www.provincia.ap.it/index.asp> (伊語)
自治体データ(人口、面積)は以下を参照しました。
<http://db.metropolis.it/comuni/Browse.asp> (伊語)